

破り割る程の勢ひで僕は叩いた。

駐在巡査も呼びびにやつたらしい。

僕は裏側へ廻つてみた。

高い塀の上へ崕の上の柿の木の枝が垂れてゐる。

僕は飛び登つた。

葉の落ち盡した枝が折れそうだ。

「此處から乗り込むが何うだ」

危ぶない藝當だつた。

冷汗が脇の下に滲む。

片方の足を塀に掛けてぶら下つても手を放すと二間ばかりの下の溝へ落ちて死ぬ恐れがある。

家の中はヒツソリしてゐる。

阿呆らしくなつて表へ出た。

四十年配の男が来て、寒いから郵便局へ案内すると言ふ。